ヨーロッパの記憶のための定点としてのベルリンの壁崩壊

—2009年11月9日の壁崩壊20周年記念行事から考える—

ロルフ・ヴィッテンブローク
西山暁義訳

[訳者解題]

以下に訳出したテキストは，2009年5月20日，国際学部講演会においてロルフ・ヴィッテンブローク氏が行った講演原稿（“Endlich gefunden? Ein Ankerpunkt für ein europäisches Gedächtnis”）である。ヴィッテンブローク氏は1946年生まれ，ザールブリュッケン，パリ，フライブルクにおいて歴史学とフランス語・フランス文化を学んだ後，ザールブリュッケンの独仏ギムナジウム（リセ）Deutsch-Französisches Gymnasium/Lycée franco-allemandにおいて教鞭を執った。その後，一時ザールラント大学歴史学科において助手を務めながら，ドイツ帝国（1871～1918年）時代のアルザス・ロレーヌにおける都市化にかんする論文で学位を取得し，再び独仏ギムナジウムに復帰し，長く校長を務めた。2006年定年で同職を退任した後は，ザールラント大学の学修プログラム開発局において，ドイツ，フランス，ルクセンブルク，ベルギーの国境横断の修士課程の策定などに携わっている。

こうした経歴からもわかるように，ヴィッテンブローク氏はザールラント，アルザス・ロレーヌというドイツ，フランス国境地域を主たる活動の場としてきた。この地域は，19世紀から20世紀前半のヨーロッパの国際関係の規定要因の1つであったドイツ，フランスの緊張関係を象徴する地域であり，しばしば両国の争奪の対象となった。しかし，それは単に外交上，あるいはナショナリズムにおける対立の歴史ということだけではなく，両国における異なる近代化への道筋がこれらの国境地域において不可避的に交差することをも意味していた。上に述べた氏の学位論文も，まさにそうした国境地域におけるハイブリッドな近代化のあり方を明らかにするものであった。他方，第2次世界大戦後は，独仏融和を中心に推進されたヨーロッパ統合の象徴的な地域となったことは，これらの地域に多くのヨーロッパ機関が置かれていることからも明らかであろう。氏が長く在職した独仏ギムナジウムも，まさに独仏融和の一環であり，現在3校存在する独仏ギムナジウム（他にフライブルク（独），ヴェルサイユ近郊のビュック（仏）の2校）のうち，ザールブリュッケン校は，1963年の独仏友好協力条約（通称エリゼ条約）に先立つ1961年に開設された，最初の学校であった。

独仏ギムナジウムは，両国出身の生徒たちからなり，その卒業生は両国の大学入学資格であるバカロレア，アビトゥーアを同時に取得することができる，独自のカリキュラムをもった中等教育機関であるが，その学校において校長を務めてきたという事実は，ヴィッテンブローク氏が独仏両国の教育カリキュラム，とりわけ専門とする歴史教育に通暁していることを意味している。この点，氏が世界で初めての試みとして，独仏二国間の歴史共通教科書の第1巻が2006年に刊行されるにあたり，その準備・学術委員会のメンバーに選ばれたことはまさに適任であった。

今回の来日も，訳者がかかわっている科研「歴史認識共有の実験～独仏共通歴史教科書の射程」（代表：剣持久木・静岡県立大学准教授）の主催による日本西洋史学会におけるシンポジウムでの講演を主たる目的としたものであったが，その副産物として実現したのが，共立女子大学における本講演である。ここでヴィッテンブローク氏がテーマとしたのは歴史教科書ではなかったが，同じ問題関心に属するテーマである「ヨーロッパ共通の歴史的記憶」であった。ヨーロッパ統合が紆余曲折を経ながらも進展していることは周知のことであるが，では19世紀の国民国家がそうであったように，現在のヨーロッパにおいても共通の歴史意識が形成されているのであろうか。この点について，ホロコーストとベルリンの壁崩壊という2つの現代史の出来事を取り上げ，これらが両極的な事象ではあるが，同一の倫理的解釈において「ヨーロッパ市民の記憶」の両輪となるべきであるという氏の主張は，独仏共通歴史教科書の叙述にも共通する，西ヨーロッパの知識人のメイン・ストリームの見解であるといえるだろう。

むろん，こうした見解がもつ西欧中心主義の問題をヴィッテンブローク氏自身が意識していないわけではないことは，本論においても言及されており，またディスカッションの際，イギリスについて学ぶ学生から出された，同国についても同じことがいえるのか，という質問に対しても，氏はEU加盟国間の温度差を率直に認めていた。こうしたヨーロッパ内部のニュアンスについては，（通訳の時間もあり）講演時間が限られていたため，十分に論じていただくことはできなかったが，講演を聴いた約250名の学生にとっては，自明の概念として考えがちな「ヨーロッパ」というものを，歴史的，社会的に再考するよい機会となったのではないだろうか。

ヴィッテンブローク氏には，当日パワーポイントにより，図像・映像資料（自身のドイツのパスポートと愛犬のEUパスポートの対比を含む）を活用し，時間の不足を補い，また刊行に当たっては追記の文章を寄せるなど，多大なご協力をいただいた。ここに記して，謝意を表したい。

＊　＊　＊

メディアの大々的な報道の下，発泡スチロール製のドミノの石が1989年11月9日のベ

ルリンの壁崩壊を象徴するために何百万人もの視聴者の目の前で倒されてからすでに半年がたち，これらの石はもう跡形もなく取り払われてしまいました。また，同じように約30カ国の国家元首や政府首脳をこの「自由の祭典」に迎えるために敷かれたレッド・カーペットももうありません。ちなみに，この日大規模な祭典を開催したのはベルリンだけではありません。それはロンドンやロサンジェルス，ワルシャワ，ベオグラード，そしてローマやパリなどでも開催されていました。ドイツの首相アンゲラ・メルケルはこの壁の崩壊の20周年記念日を，ドイツの現代史において最も幸福な日であると言いましたが，それは明らかにそれ以上のものであったのです。

1. ヨーロッパ統合プロセスの一里塚

この1000個もの巨大なドミノの石による芸術的な行為は，ブリュッセルのヨーロッパ委員会との協力のもとで準備されたものでした。全世界の人々に，この石の1つ1つを作る機会が与えられました。その中には，委員会委員長のジョゼ・マヌエル・バローゾやヨーロッパ議会議長のジェルジィ・ビュツェックといったEUの首脳も含まれており，彼らが見守るなか，ポーランドの自由労組連帯の指導者であったレフ・ワレサが登場し，20年前の（社会主義体制の）ドミノ的崩壊を繰り返すかのように，最初の石を倒したのです。壁崩壊20周年に寄せてのヨーロッパ連合の記者発表では，「この出来事はヨーロッパの現代史において比類のないものであり，同時にヨーロッパ統合プロセスの一里塚である」と述べられていました。

しかし振り返ってみると，壁崩壊がこうした特別な意味を持つまでには，長い躊躇の期間があったことがわかります。壁崩壊の二日後，当時ヨーロッパ委員会の委員長であったジャック・ドロールは，これでようやく東ドイツの人びともヨーロッパに居場所を見つけることになるであろうと，当時としては冷静な診断を下していました。ドロールは，その後ワルシャワ条約機構の崩壊があれほど急速に進んでいくことになろうとは想像できなかったのです。1999年の壁崩壊10周年の記念行事も，かつての東ヨーロッパ陣営諸国との加盟交渉がまだ全く始まっていなかったこともあり，今回のようなヨーロッパ的性格をもつにはいたりませんでした。

2. ダイナミックな記憶の構築

ここで注意しなければならないのは，ヨーロッパ共同体の委員会において，ヨーロッパに関係付けられたアイデンティティというものを奨励することなどできるのか，もしできるとすればどのようにか，ということは，すでに長い間議論されていたということです。1973年12月には，当時のヨーロッパ経済共同体の9つの加盟国の首脳たちが，「ヨーロ

ッパ・アイデンティティにかんする文書」を批准しました。この当時の緊張緩和（デタント）政策の精神において構想された合意文書は，はっきりとした歴史的参照点を確定することを避け，その中身を柔軟に埋めることを勧めていました。「ヨーロッパ・アイデンティティの発展は，ヨーロッパ統合事業の活力に従って進むことになろう」と，そこには述べられています。

しかし，容易に理解できることではありますが，その後の記念日や記念行事といったシンボル政策においては，西ヨーロッパの視点が長い間支配的でした。このことは一方で1985年に創設されたヨーロッパ記念日について当てはまります—ヨーロッパ評議会設立の5月5日，そしてシューマン・プランが公表された5月9日は，西ヨーロッパの歴史のカギとなる歴史的日付でした。ヨーロッパ委員会の管轄下にある「ヨーロッパ文化首都」の選出に際しても，かつてワルシャワ条約機構の領域にあった東ヨーロッパの都市がこの栄誉に与ることになるのは，2000年のクラクフ（ポーランド）まで待たねばなりませんでした。

3. ホロコーストの記憶の義務

1990年代以降，さまざまな国の歴史家たちは，ヨーロッパ・アイデンティティを歴史的に定着させるために，新しい考え方を発展させるようになりました。彼らは将来の人間の共存のあらゆる形態を特徴づけるために，ホロコーストへの集合的記憶を普遍的な道しるべに，そして一連の価値の基盤にしなければならないと考えたのです。このことに深く結びついていたのは，「アウシュヴィッツ」は文明化された人類に対する最大の犯罪行為が凝縮された象徴であり，それはとくにヨーロッパにおいて将来の集合的アイデンティティの焦点とならなければならない，という要求でした。「記憶への義務」という言葉は，新たな絶対的命令となり，この問題意識が，2000年に開催された「ストックホルム・ホロコースト国際フォーラム」に参加した700人もの参加者の精神を満たしていました。ここでは当時アメリカ合衆国大統領であったビル・クリントンを含め，25カ国の政府首脳が発言しました。その最終宣言において彼らは，「ナチによって計画され実行されたホロコーストは，永久に我々の集合的記憶の中に定着し続けなければならない」と，自らの意志を根拠づけたのです。ヨーロッパにホロコースト記念日を創設しようという会議の提案は，その後いくつもの国において受け入れられました。1月27日，すなわち（ソ連軍による）絶滅収容所アウシュヴィッツの解放の日がホロコースト記念日となっています。

しかし，実はこうした動きに対しては違和感を持つ人も少なくありません。またホロコーストという重荷となる20世紀の犯罪が，とくにヨーロッパの若者にとっても共通のヨーロッパの記憶の中心的な参照点になることに適しているのか，という問題もあります。そこで主張されるのは，本来若者には未来志向の方向付けを与えるべきなのに，むしろ過

去についての集合的な記憶を過剰なまでに動員しようとする「負の建国神話」が問題だ，ということです。実際に，ホロコースト記念日はまず2005年国連総会によって公的な記念日であると宣言されましたが，その後ヨーロッパ連合はこれをさらに進め，2009年には，すべてのEU加盟国においてホロコーストはなかったと否定することは刑事的追及の対象とされることになりました。

4. ヨーロッパの記憶の2つの結晶点

ここでお話ししようとしているのは，ヨーロッパの記憶のある定点（ホロコースト）を別の歴史的意味づけを作ること（ベルリンの壁崩壊）によって取り換えてしまおうということではありません。むしろはっきりと言っておかなければならないのは，「二度とアウシュヴィッツを起こしてはならない」ということ，そして1989年の平和革命という2つの道しるべが他に類を見ない解釈の意義をもちうるのは，つまるところ，それらがまさに同じ倫理的な社会設計の経験，価値観，そして希望を1つにまとめているという事実によるものなのです。個人の人権の尊重が国家の行為の中心的な命題とならなければならないという認識は，根底においてアウシュヴィッツから鉄のカーテンの崩壊へと至る道を指し示しており，この2つの出来事はともにヨーロッパの記憶の結晶点となる資質を有していると言えます。この2つを緊密に，そして一連の流れの中に結びつけるということは，難しいことではありません。実際，（人権尊重や紛争の武力解決などを謳い）冷戦期における東西対話の促進に寄与した1975年の全欧安全保障会議（CSCE）のヘルシンキ宣言は，その歴史的次元において評価されており，1945年から1989年までの因果連関のなかに位置づけられています。ここで明らかとなるのは，この全欧安全保障会議に集まった35カ国の政府首脳たちが，意図せざる形で東ヨーロッパ諸国にも市民運動の成立を可能にする前提条件を生み出し，それらが鉄のカーテンの崩壊の原動力となったということです。この全欧安全保障会議にはアメリカ合衆国，ソ連，カナダとともにヨーロッパのほとんどすべての国が参加していました。それゆえ，1989年のベルリンの壁崩壊で頂点を迎える東ヨーロッパにおける平和革命は全ヨーロッパ的プロセスの幸運な終着点であったといっても，あながち不当なことであるとはいえないでしょう。

5. 壁の崩壊―大きなアイデンティティ形成の可能性

ヨーロッパ委員会がこの平和革命を熱心に評価していることは間違いありません。ただし，そのために用いられ，多くの言語に翻訳された「自由で統一されたヨーロッパ」という標語は，EUに狭く限定された，問題含みの眼差しを露呈していることも否定はできません。実際，ベルリンの壁崩壊はまさにアイデンティティ形成の大きな可能性を有してい

ますが，それは卓越したメディアの記録に多くを依拠していました。そこで映し出されたのは，その無力さゆえに親近感さえ覚えるような東ドイツ共産党の役人（国境警備隊の隊員）が，その後の展開を知ることもなく，自由を求める大規模な運動に対して当初計画されていたよりも早く壁の門を開いてしまった姿でした。そして最初は相当躊躇しながら国境を越えていった東ベルリンの市民たちが，待ち構えていた全く見知らぬ西の人間たちと過剰なまでの高揚感のなかで抱き合う姿でした。こうしたイメージは感情に強く訴える劇的な効果をもっており，外国の観察者にもつねに鳥肌を立てさせる光景であるといえるでしょう。

EU の委員会はコミュニケーション手段を大規模に活用して，鉄のカーテンの崩壊をその広報活動の中心に据えました。そこにはさまざまな加盟国における 2009 年の記念行事がすべてリストアップされているだけではなく，若い市民の人たちが 1956 年のハンガリー動乱から 1989 年の壁の崩壊に至るまでの最も重要な歴史上の事件を概観できるような短いビデオ・クリップが作られ，それは今でも見ることができます（www.europa1989-2009.eu）。このハイライト的に照らし出された自由を求める運動のクライマックスへの記憶のなかに，ある男の子の家族の歴史が編み込まれています（講演中に映写）。この男の子は 1989 年 11 月 9 日に生まれ，再び勝ち取られた自由という贈り物の象徴として描かれています。子供である主人公は，両親たちとともに西ヨーロッパを「発見」し，現在ではヨーロッパの統一と呼ばれるようになった 2004 年の EU の東方拡大を体験します。最後の場面では，彼は 20 歳の誕生日を友達たちとともにベルリンのブランデンブルク門の前で祝うことになります。これらすべてが 150 秒という時間のなかに凝縮されています。まさに当時体験した歴史のスピードをきわめて巧みに表現しているものといえるでしょう。このフィルム以外にも，さらに無料でダウンロードできる自由の運動のさまざまな歌や，クイズ，そして関連するウェブページやブログへの無数のリンクが貼られています。

ただし，ここで指摘しておかなければならないのは，このビデオクリップの最初のプランが至る所で支持を受けたわけではない，ということです。とくにポーランドの政治，文化エリートたちは，この短編映像に対して激しく抗議しました。というのも，彼らの眼には，それがもっぱら西ヨーロッパの視点に偏っていると思われたからです。実際，最初のプランでは，東欧諸国における自由の運動にとってポーランドのキーパーソンたちには言及されていませんでした。彼らは，すでに 1989 年のベルリンの壁崩壊以前から，ソ連勢力圏における人権の尊重のために勇敢で持続的な闘争を展開していたにもかかわらず，です。実際，その代表的人物であるレフ・ワレサやローマ教皇ヨハネ・パウロ 2 世の名前も挙げられず，自主管理労組「連帯」の活動についても，何ら言及されていませんでした。その後，ヨーロッパ委員会がビデオクリップの作り直しを求め，いくつかのシーンが追加されました*。さらに，ポーランドの自由を求める運動の役割を公式の記念式典において評価するため，注目を集める演出が行われました。冒頭で述べたように，「連帯」の指導

者であったワレサに，2009年11月9日，ブランデンブルク門の前で発泡スチロールの壁の最初の「石」を倒す名誉が与えられたのです。それによって，1989年の出来事がさらに象徴的に，そしてマスメディアに対して効果的な形で記憶されることになったのです。

6. ヨーロッパの記憶の場？

幸運なことに，ジョージ・オーウェルの『1984年』とは異なり，私たちの社会にはヨーロッパの記憶を勝手気ままに操作するための技術があるわけではありません。ヨーロッパ政策上発せられた法令や演出された儀式もその役に立つわけではありません。過去というものを集合的に解釈するということは，さまざまなアクターの間で行われる交渉であり，つねに変化可能であり，どのような未来を目指すかということにかかわるプロセスなのです。しかし一般的に，集合的記憶というものを国境を越えて開いていこうとする傾向が強まっていることは確かです。このことはとくにドイツとフランスの関係においてよく示されています。壁崩壊記念行事の2日後，フランスの大統領ははじめてドイツの首相を，第1次世界大戦終結をともに祝うための式典のためにパリへと招待したのです。

この，まさに2009年に凝縮された大規模な記憶のブームは今や過ぎ去りました。しかしベルリンの壁崩壊が将来，ヨーロッパの記憶の中心的な場所となる十分な見通しがあります。現在，ヨーロッパにおいて，この自由のための運動の象徴的図像を掲載しない歴史教科書は1つもないと言っていいでしょう。もしかしたら，11月9日というドイツ一国の歴史にとって，重荷となる記憶にも満ちた魔法のような日付（1938年帝国水晶の夜，1923年ミュンヘン一揆。1918年ドイツ革命）は，いつの日にかヨーロッパのレベルでポジティブな意味が与えられる記念日になるかもしれません。

もちろん鉄のカーテンの崩壊は，ヨーロッパ全体，そして何より東ヨーロッパの，かつてのワルシャワ条約機構加盟国の市民運動をはじめとする多くの政治的アクターが関わって実現した崩壊過程の結果でした。しかし，このプロセスが1989年11月9日にベルリンにおいて頂点に達し，そこにおいて象徴的に凝縮され，ドイツの首都が集合的認識において新たな時代の誕生の地となったかのように見えることは，ドイツ人の立場としては幸せな運命の定めであったとしかいえません。しかし重要なことは，前代未聞の歴史的犯罪と自由を求める運動の成功が，その極端さと両者の緊張関係においてともに同じ一国の，そしてヨーロッパの歴史の定点となりうるということを示すことなのです。

---

* Stefan Auer, Contesting the origins of European history. The EU narrative of Franco-German reconciliation and the eclipse of 1989, in: http://www.eurozine.com/articles/2010-09-10-auer-en.html（最終アクセス：2010年11月18日）.